
当代魔王は勇者様！？

鬼灯 更紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

当代魔王は勇者様！？

【Nコード】

N4011L

【作者名】

鬼灯 更紗

【あらすじ】

魔王の魔力の器に選ばれ、魔界に飛ばされた大学生の夜魔聖。濃い面子に囲まれ、生来の無口無表情で何かと勘違いされつつ何とか人間に迷惑をかけないように魔界を自給自足可能にしたのに、何故か今度は勇者として地上に召喚！？
内心が顔に出ない魔王様、今日も元気に頑張ってます。

一話（前書き）

はじめまして、鬼灯更紗です。

書き始めたからにはどれだけかかっても完結まで頑張りたいと思いますので、よろしくお付き合いくださいませ。

一話

精緻な銀細工の燭台で、蝋燭の炎が揺らめく。

正確には、蝋燭ではなく魔力の炎らしいが、俺には蝋燭にしか見えん。

床には扉から俺の座っている椅子まで……否、椅子の後ろにある壁まで真紅の絨毯が一直線に敷かれ、天井には豪華な半透明のシャンデリア。

ちなみに外観はかなり立派な石造りの城だ。部屋数は把握するのめんどいぐらいある。

門から城の入り口まではアーチがあり、ここにしかない漆黒の薔薇が咲き誇って通るものを楽しませる。噴水はないが、薔薇の生垣が迷路のように作りこまれているので城のバルコニーから見下ろすと中々に壮観だ。色は緑と漆黒だが。

門から始まる城の敷地内にあるもの全て、俺の……魔王の魔力で構成されているらしい。内装から城内の構造、生垣やアーチの形、その他諸々全て。

だから、俺が変えたいと思えば変わる。それも一瞬で。

最初にこの王の間に踏み込んだ時、成金趣味満載って感じの悪趣味な黄金の玉座を見た瞬間、即座に作り変えた自分がいた。あんな悪趣味な椅子には座りたくなかったからなあ。

今座ってるのは、光沢のある黒の素材で出来た落ち着いた椅子だ。

あ、言い忘れてた。俺の名前は夜魔聖^{やま あきら}。れっきとした日本人男子で、大学生……だった。ちょっと前までは。

通学途中に強烈な眩暈と頭痛に襲われて、咄嗟にきつく目を閉じて蹲った俺が再び立ち上がった時、周囲はすでに魔界だったのだ。ざっと周囲を見回した時には、俺はもう答えを得ていた。と言う

か、俺の頭の中に勝手に答えが浮かんできた。

すなわち、ここは魔界であり、俺はたまたま器を失くした魔王の魔力の次の器に選ばれてこの世界に呼ばれたと言う事を。

ちなみにこの時、ふざけんなど思った直後にあちこちに落雷があった。

どうやらこの魔力、俺の感情にも呼応してあれこれ現象を起こすらしい。傍迷惑な。

何せちらつとあの山邪魔だな、と思っただけで次の瞬間そこが更地になるなんてありえないだろ、普通。だから、一定量の感情じゃなければ魔力が反応しないようにあれこれ頑張った。じゃないとただの公害だ。

「……チートにも程がある」

「どうかなさいましたか？魔王様」

「いや……」

いかんいかん。思わず口から呟きが出てたわ。

傍らに常に控えてる宰相が即座に対応し、俺の正面で跪き、低頭したまま報告していた將軍は不興を買ったかと青褪めている。頭の上についてる獣耳が。

「……続ける。気にかかる点もあったが、聞き終えてからでいい」「はっ」

再び張りのあるバリトンが報告をし始めるのを聞きつつ、頭は別の事を考える。

無駄にチートな設定されてるおかげで、明後日の事考えながらも報告を聞くぐらい造作もない。

宰相のイデアは悪魔王。

3将軍の一人、アデイスは魔獣王。

後の二人は魔竜王のレジフト、吸血鬼王のアースラ。

この四名が俺に次ぐ魔力を持ち、魔大公の位にいる。権力で言えば俺のすぐ下だ。

ちなみにアデイス以外は揃いも揃って曲者なので、アデイスは魔大公一の苦勞人だ。常識人って大変だなあ、と毎回思う。

絶対数は魔獣＞悪魔＞吸血鬼＞魔竜の順だが、実力順にすると魔竜＞吸血鬼＞悪魔＝魔獣になる。

個々ではなく、種族全体の能力で分けた結果だから、魔大公四人がそれぞれガチバトルしたら結果はその時の体調やら時の運やらで大分変わると思われる。

まあ、その前に魔界の半分が焦土になりそうだからやらせないけどな。

ちなみに魔獣と魔物は別物。言葉が喋れてかつ人の形になれるのが魔獣。魔物は喋れても片言で、人の形にはなれない。

と、全然関係のない事を考えてたらアデイスの説明が終わった。

「……勇者、ね」

「いかがなさいますか？」

「俺の命は聞かないと地上に飛び出して行った奴等がいた筈だが……原因はそいつらか？」

「おそらくそうでございましょう。現在我等四種族、全て魔王様のご命令により地上の者等と不必要な対立、接触はしておりませぬゆえ」

アデイスの報告は、要約すれば『地上で魔王を名乗る魔族が暴れまくって被害甚大。業を煮やした神聖王国が近々勇者召喚の儀を執り行うらしい』と言う事だった。

かつて人間だった俺は、やはりまだ人間としての感覚も持っている。だから、魔王権限で『人間に迷惑をかけるな』と言ってみた。知識を総動員して調べた結果、どうしても人間を殺さないと生きていけない種族はいなかったから。吸血鬼にしろ悪魔にしろ、魔族が人間を襲うのは一種の趣味のようなものだ。

人間に媚び諂う気はないが、必要以上に軋轢を生もうとも思わない。歴代魔王の時代から積もりに積もった怨念は魔王の業として受け入れるが、俺の代で新たな怨念を作るつもりは更々なかった。

だからこそ、強者には絶対服従と言う魔族の習性を利用した、魔王権限の禁止令を発令したのだ。聞かなかった奴が若干いたけど。

「引き続き、情報収集を行え。地上で暴れているバカ共が一掃される分にはかまわんが、それが俺の命だと勘違いされ、こちらに被害が及ぶ可能性もある」

「承知いたしました」

「くれぐれも余計なちよっかいは出すな。……アイデア」

「はい」

「アースラと協力して地上で暴れてるバカ共の詳細を調べろ。勇者に負ける気はないが、鬱陶しい面倒事は起こる前に潰すに限る」

「魔王様が自らお出ましになるのですか？」

「……これ以上目に余る特大のバカをかますなら、な」

「畏まりました」

一礼したアイデアが転移で消える。

珍しく一人になった王の間で、肘掛けを利用して頬杖をついて、窓の外に広がる魔界の光景を見るときもなしに見る。

現在、魔界はすこぶる平和だ。

人間にちよっかい出すのが趣味だった魔族連中は、今は魔物狩りや畑仕事と言った新たな趣味に目覚めている。

原因は、俺がこの城の地下にある、魔界全土を潤している源泉に血を一滴落としたからだ。

一滴でもとんでもない魔力を有していたらしく、結果、水を介して魔界全土に俺の魔力が満ちた。

更に、魔力を有した水を飲んだ魔物やそれで育てた作物の質が大幅に向上。

強さも上がったから狩るのが難しくなり、人間狩るより面白い、と魔竜族や魔獣族が嬉々として狩っている。元々魔物の肉は魔界では食用としても使用されていて、今までは人間や人間界の家畜の方が美味かったらしい。しかし、俺の血で味が格段に良くなったから、今では率先して魔物を狩り、肉が主食の種族の集落には肉屋がある。

野菜や果物を食べる風習は一部にしかなかったらしいが、俺の魔力でこっちもかなり上質になった為、あちこちで畑を作る連中が増えた。一番熱心に栽培してるのは悪魔と吸血鬼の一族。

精気や魔力を糧にしてる連中だが、俺の魔力をたっぷり含んだ水やその水で育てた野菜、果物などで十分過ぎるほど満たされるから人間襲う必要がなくなったらしい。今や協力して品種改良にまで手を出してる始末だ。美味いからいいけど。そのおかげで、どの種族の集落にも八百屋があり、魔竜族からはなんと菜食主義者が出たらしい。

レジフが笑いながら報告してきたんだが、どう反応しろと？

ぶっちゃけ、品種改良技術は人間界より遥かに進んでると思う。

迷い込んで来たり諸事情でやって来て永住してる連中の為に、人間界で広く栽培されてる野菜や果物とか料理に使われてる香辛料とか、色々作られてるから。

最近では食用に出来る花を作ろうとしてるらしい。どこまで行く気だ、あいつらは。

ちなみに月一単位で源泉には血を垂らしている。ほっという薄まられたら困るからな。

おかげで源泉の真上、つまり城の敷地内で育ててる野菜や果物の質はかなり良い。ここの葡萄で作ったワインは魔大公達の争奪の的だ。

つまり、わざわざ人間界まで遠征して略奪だの虐殺だのしなくても、魔界で十分自給自足が可能になってるって訳だ。

俺としても、わざわざ世界が違うとは言え元々の同族と戦争したとは思わない。だからこそ……この平穏を壊そうとする奴に容赦してやるつもりはない。

守るべき魔界の民に手をかけるのは、正直ちよっと気が引けるんだが……。

「魔界に害が及ぶなら……」

そうなる前に、排除する。

一話（後書き）

誤字脱字等ありましたら音速でつつこみをいれてやってください。
作者は妙に抜けてますので素で気付いてない場合が多々ございます。

二話（前書き）

アイデア以外の魔大公の口調が定まらない……特にレジフ。
だから今回彼はいなかったり……。
精進します。

二話

人間界で一番広大な土地と強大な権力を持つてゐる神聖王国が、地上で暴れてゐる自称魔王討伐の為に勇者を召喚すると言う噂をアデイスが仕入れてきた二日後。

二日前にアデイスが片膝ついて跪いてた場所に、今度はアースラとイデアがいる。

「……報告を聞こう」

「直属の眷属に探らせた結果、本拠地としてゐる場所と規模、人間界への被害が判明致しました」

「随分と派手に暴れまわっているようです。魔界の入り口から正反對の、辺境に位置する小国を乗っ取り、そこを起点として隣国を次々蹂躪しているとか」

「……………バカ共め」

あまりの行動の阿呆さ加減に呆れかえる。ついでにムカツと来た勢いで魔界の空に雷鳴が響き渡って、慌てて感情を制御した。

一瞬でボーダーラインを超えた場合、魔力が動くのはどうしようもないから、その後に余計な現象が続かないようにするぐらいしか対策が取れないのがちょっと厳しい。

驚かれたらうなあ、あの雷鳴。近くの街に住んでる魔獣族が拾ったって言う人間の女の子、怯えてなきやいいけど。

「規模は？」

「前魔王陛下のご子息を筆頭に、四種族合計で500ほどです。情けなくも我が吸血鬼族の者が二割。大半は魔獣族との事でしたが…

：腹立たしい事に我が一族が一番恥知らずな行動を取っておりまして。陛下、ご出陣の際には是非、私もお連れくださいませ。あの恥知らず共は我が一族に名を連ねる価値すらございません。この手で葬りたく存じます」

「……お前もか？アイデア」

「お許しがいただけるのであれば、今すぐ実行に移したいですね。アデイスとレジフも同じ事を言うでしょう。仮に魔界への帰順を望んだとしても、地上で虐殺や略奪、蹂躪する事に慣れきったあの連中が今の魔界のあり方に適応するとは思えません。人間と見れば飛び掛って引き裂くような、陛下の不興を買う道まっしぐらなバカ共です。生かす価値もない」

にっこりと、とても綺麗な、しかし目が全然笑ってない顔でアイデアが笑う。

背後に大魔神が見えた気がするが気のせいだと思っところ。

とりあえず、魔大公四人を怒らせるほどの超絶なバカを人間界に飛び出してつた連中はやってるらしい。酌量の余地とか与える気、皆無だな、こいつら。俺もないけど。

さて、どうするべきか。

地上のバカ共に容赦をする必要はない。が、下手に出て行って神聖王国が召喚しようとしている勇者と鉢合わせしたらかなり面倒だ。アデイスから何の報告もないから、まだ召喚の儀を行ってはないみたいだが、移動中に儀式をされる可能性がある以上、迂闊には動けない。

「「陛下!？」」

「……騒ぐな。召喚の円陣だ」

「召喚？人間がピンポイントで陛下を召喚しようとしていると？身の程知らずな」

「しかし我等四種族ならまだしも、陛下を直接召喚できる腕の持ち主が人間にいるとは思えんぞ。第一、円陣自体がない筈だ」

「では実際に玉座の真下に浮かんだ円陣をどう説明するんですか？」

今後の方針を考えてたら、椅子の真下に召喚の魔法陣が出てきた。同時に叫んだアースラとアイデアを制して観察すると、与えられた魔王の知識が答えを伝えてきた。

魔大公すら直接召喚する事が出来ないのに、そこをすっ飛ばして魔王に到達するのは人間には不可能。故にこれは、女神の業^{わざ}。界を越え、空間を越えて、世界を調停する者を召喚する為の陣。

理解した途端、笑いが漏れた。

これは笑わずにはいられない。だってなあ？これ、勇者召喚の魔法陣だぞ。

地上で魔王を名乗って暴れてるバカを討伐する為に、神聖王国が女神に願って行っている儀式。本来なら、この世界か、俺がかつて存在していた世界か、はたまた全く違う別の世界から、魔王を倒す為の存在を連れて来る為の魔法陣。

それが、この俺の、現魔王の足元に出現した。笑わずにはいられない。だが、好都合。

魔王の魔力の器に選ばれて魔界に召喚された時は「神様なんぞクソくらえ！」と思ったもんだが、今回ばかりは感謝だ。これで、地上のバカ共を倒した勇者が勢いづいて魔界にまで侵攻して来ると言う事態にはならない。

俺が、させない。

「……面白い」

「まさか、応えてやるおつもりですか？」

「好都合だからな」

「陛下、ご説明いただきたく存じます」

くつくつ笑い続け、詳細を語らない俺を二人が不思議そうに眺めている。

痺れを切らしたらしいアイデアが問いかけるのとはほぼ同時に、珍しく扉を使わず転移の魔法でアデイスが王の間にやってきた。

余程慌てているらしく、転移の着地点がアースラの真上で、現在進行形で潰している事に気付いていない。かなり珍しい光景にアイデアは笑いを堪えてプルプルしているが、放つといたら血の雨が降りそうだから、軽く手を振ってアデイスに踏まれていたアースラを横に移動させた。

恨めしげにアースラが睨んでるんだが、全く気付いてないな、アデイス。

「……どうした？」

「神聖王国がついに勇者の召喚を——っ!？」

「ああ、これがそうだ」

足元を見て硬直されたから、とりあえずアデイスの脳内に到来してるだろう疑問を肯定してやっというた。アイデア達も思いつきり固まったなあ、おい。

「魔王の俺を勇者として選定するとは、この世界の神は何を考えているのやら。まあ、無駄に熱血で正義感に満ち溢れた奴が勇者として召喚されるよりはマシだが」

「確かに。陛下が勇者も兼任されるのであれば、魔界が脅かされる事はなさそうですが……人間が納得するでしょうか？」

「いや……聞いた話だが、勇者とは、人間が神に乞い、神が選定して地上に送り出す者。言わば神の代理人らしい。勇者を疑う事は、その勇者を選定した神を疑う事だ」

「なるほど。ならば、神の一の子と常々公言している神聖王国の間達は、召喚されてきた陛下を疑えぬな」

納得したらしい三人がいつせいに俺を見た。

同時に膝を折り、異口同音に「ご命令を」と言う姿は非常に様になってるが今回俺が命じるのは待機だ。正確には呼ぶまで待機。

「これは一人用だ」

「では陛下、愚か者共を肅正する際には、お呼びいただけますか？我等を」

「ああ、お前達四人を呼んだ方が確実だ」

「では、レジフには俺が伝えておきましょう」

「任せる。……アイデア」

「はい、エレノア料理長にだけは陛下のご不在をお伝えしておきます」

「頼んだ」

お任せください、と言う各々の返事を聞きつつ召喚に応える。

最初にこっちに呼ばれた時のような頭痛も眩暈もなく、ただ浮遊感だけがある。慣れたのか、それとも勇者召喚と魔王の器を呼び寄せるのは違うのか……さて、どっちだろなあ。

三話（前書き）

難産でした……

そしてやっぱり定まらないレジフの喋り方orz

三話

浮遊感が終わる。

硝子製や陶器製の物が砕けたような音と同時に、足が地に着いた。

閉じていた目を開ける。

魔法陣のすぐ外で、招くように両腕を広げていた緩やかなウェーブのかかった長い金髪の女性が、嬉しそうに微笑んでいた。

左右に視線を滑らせると、質のいい布や見事な細工の台座の上や周囲にきらきら輝く破片が散っている。砕けた音の元はあれらしい。

大方召喚された時の俺の魔力に耐え切れなかったんだろう。元に戻すのぐらい簡単に出来ると思うが、今はまだ放っておく。

ここはどうやら神殿の一室らしく、窓から入る光で室内は明るい。昼時あたりか？

いるのは神官らしき服装の男が二人。その二人に囲まれている細かな刺繍の施された上位神官らしき服装の男が一人。騎士服を着た男が四人と女が一人。やたら豪華な服を着た男女が一人ずつ。恐らく国王と王女だろう。この国の王妃は既に故人だった筈だ。そして、広げていた腕を下ろしたものの、まだ満面の笑みを浮かべている美女一名。

俺の中の知識が正しければこの美女は……

「私の召喚に答えてくれてありがとう。当代にして初代と同じ行いをしている魔界の王」

「……理解してなお、俺を選んだのか」

「そうよ。私はこの世界の女神エリスアーカンジェラ。この世界を生み出し、維持し、見守る者。――あなたも本来ならそうなのよ？ 初代の力と知識を受け継ぎ続ける魔界の王」

威厳のある声音で名乗りをあげた後、とんでもない発言をかましやがりました、この女神様。

後ろで絶句してる人間達の存在を忘れたのか、それとも故意に聞かせているのか、女神は世界の始まりを語り出す。

俺の中にある知識と力の、本来の持ち主と二人で人間界と魔界を作った事。女神は人間界を、もう一人は魔界を、それぞれ維持し、見守る事にした事。俺が魔界でやっているように、魔王の魔力で魔界を豊かにしていた事。ある時突然魔王は消え、知識と魔力のみが残されていた事。そして数百年後、それを受け入れる事が出来た存在が、その力と知識を持って人間界に攻め入った事。人間達の嘆きと、崩れかけた世界のバランスを保つ為に、器を壊せる調停者（後の勇者）を選定し、地上に送った事。

「それから、何百年も何千年も、どれだけ器を壊されても初代の知識と魔力は新しい器に受け継がれ続けていった。……当然よね。もとをただせば、彼も私と同じ創世の神にして世界を支える一柱。その消滅は、世界の崩壊を意味する」

「……女神一人では、支えきれないのか？」

「無理ね。仮に崩壊を防いでも、今度は世界の運行に支障が出る。そして遠からず、世界は壊れる。――当代の魔王が、初代みたいな人でとても嬉しいわ。だから、あなたを選んだの」

「俺に否やはないが……後ろの人間達はどうか」

「？あなた達の望みどおり、地上で暴れてる魔王を倒す勇者は召喚したわよ。何か問題がある？」

くるっと後ろを振り返って首を傾げる女神様。どうやら本気でわかってないらしい。

今まで憎悪の対象だった魔王が実は二人いて、地上で暴れてる方が偽物ってだけでも信じられないだろうに。魔界から本物の魔王が勇者として女神に召喚され、さらにその魔王が女神と同種が存在したとか、神殿関係者が残らず発狂してもおかしくないんじゃないだろうか。

そんな事を考えていたものだから、反応が遅れた。

胸倉を掴まれて引き寄せられ、咄嗟に踏ん張れずに上体が前に倒れる。

で、何が起こったかといえば……問答無用で女神様にちゅーされました。

なんかとんでもない量の力が流れ込んできたんですけど、これ、あれか？勇者に与えられる女神の祝福とか言う奴か？いいんだろうか、魔王の俺に与えちまって。

「問題ないわ。だってあなたは当代の魔王であると同時に、私が選んだ当代の勇者でもあるもの」

輝かしい笑顔で宣言して、女神様はあっさり消えた。世界を見守る存在が、あまり長い間ひとつの国に出現し続けるのは色々とまずいらしい。

女神様があっさり消えた室内にはどうしようもないぐらい重たい沈黙が流れてる。

とりあえず、砕けた祭具っぱいのを直しといてやりますかね。女神様から放り込まれた力なら余計な効果はつかないだろ。

パチンと指を鳴らすとビデオテープとかを巻き戻したように砕けた破片が寄り集まって元の形に戻った。余計な効果はつかないだろ

うと高を括ってたら、どうも力の配分を間違えたらしく祭具がパワーアップしやがった。慣れるまではこっちもかなり細心の注意を払って揮った方が良さそうだ。

「……来い」

パワーアップした祭具のおかげで、召喚の円陣にも魔力が満ちていたから利用させてもらう事にする。魔大公四人に呼びかけたら、即座に応じてきましたよ。待ち構えてたのか？お前ら。

警戒を強めた騎士達に気付いてないわけなろうに、四人は綺麗にシカトして俺の前に跪く。何気に四人とも本気装備でした。小1時間ぐらいであっさり片つきそうだな、おい。

「お呼びにより、参上いたしました。陛下」

「……で、バカ共はどこです？」

「気が早いぞ、レジフ」

きよろきよろわざとらしく周囲を見回して、警戒してる騎士に喧嘩を売りそうなレジフはアデイスが窘めてくれた。頑張れ唯一の常識人。

アイデアとアースラは周囲を見回して事情を飲み込んだらしく、非常に面白そうな顔をしている。頼むから喧嘩ふっかけるなよ。

「人間界には久々に出てきましたが……全く変わり映えしませんねえ。陛下、転移で本拠地に乗り込んでさっさと終わらせて帰りましょう。料理長に陛下がお留守では作り甲斐がないとぼやかれてしまいました」

「私には香辛料の調達をしろと言ってきたぞ、あの女」

「おや、頼りにされているではないですか。アースラの舌は厳しいですからね。では、さくつと片付けて、どこかの市場で香辛料を見

て帰るとしましょうか」

「……エレノアへの土産を忘れるなよ」

とつとと帰る算段をしているアイデアにぼつりと付け加える。途端に雪花石膏のような白い肌がぱつと赤くなった。何故そこで赤くなる。

城で料理長を務めているエレノアは、ハーフエルフ。それもエルフとダークエルフのハーフと言う極めて珍しいハーフだ。どう言う経緯でそうなったのか、馬に蹴られたくはないから必要以上に首をつつこんでないのでわからないが、今はアイデアの妻でもある。

ちなみに普段はそうは見えないが、アイデアの方がベタ惚れだったりする。

「光物の類はともかく、新しいレシピ集や衣服などは喜ばれるのではないか？」

「木彫りの髪留めとかも良さそうだな。料理の時に髪が邪魔だつて前言ってたし」

「何でアデイスが知ってるんです、そんな事」

「軽食を作ってもらった時、ばやいてたのが聞こえたんだ」

メラメラ嫉妬の炎を燃やし始めたアイデアにアデイスがあっさり答える。放つとくと大変な事になるからなあ。エレノアが関わると途端にいつもの完璧人間っぷりがガラガラ崩れるのは面白いが、気をつけないと嫉妬の炎に炙られる。

さて、何時までもじゃれてないで、さっさと終わらせるとするか。俺もエレノア料理長の料理が食べれないのは寂しいからな。美味しいんだもん、あの人の料理。味噌とか醤油があったらぜひ日本食を作ってもらいたい。米とか大豆とか、どっかに原種ないもんかねえ。見つけたら品種改良を頼んでいつでも米が食べれるようにしたいもんだ。

「……行くぞ」

『はっ!』

「お待ちください!」

大掛かりな転移の魔法陣を展開した所で、待ったがかかった。

三話（後書き）

誤字脱字の有無は一応何度も見直してますが、見落としていたらご一報くださいませ。

四話（前書き）

ひよっとしたらそのうち手直するかも……

王女様、出したはいいけど予想以上に動かしにくい or z

四話

振り向いた先にいたのは、固く掌を握り締めて恐怖を見せないようにと必死なこの国の王女だった。怖いなら声をかけてこなけりやいいと思うんだが、何か思うところがあって声をかけてきたんだろうと展開していた魔法陣を消す。

「何か御用でしょうか？お嬢さん」

「ま……魔王を名乗る者を、討伐して、くださるのですか？」

「ええ。流石に、目に余りますのでね。陛下の足元にも及ばぬくせに魔王を名乗るなど、おこがましいにも程がある」

アデイス達も無言で頷いて同意を示す中、アイデアの穏やかな対応に少し恐怖が薄らいだのか強張っていた王女様の表情が少し柔らかくなった。

基本的に、魔族の態度はあまり信用しちゃいけないんだけどなあ。特にアイデアは悪魔だし。人間騙すのはお手のものだ。

見事に騙されて安心した王女様は、自称魔王の本拠地に取り込む前に、奴等が支配している村や街を解放して欲しいとかのたまった。端からひとつずつ潰していくって最後に本拠地を潰せって事らしいが……ああ、アイデアがいい笑顔だ。

「お言葉ですがお嬢さん、先に頭を潰した方が確実なのですよ。元々魔族は弱肉強食。大半の連中は自分達の中で一番の強者が自称魔王だから奴に従っているのであって、忠義を持って仕えている者は一握り以下です。だからこそ早々に頭を潰し、忠義で側に控える者

等を屠れば残るのは烏合の衆。叩き潰すのはとても容易です」

「けれど、支配下に置かれている村や街には住民がいるのです。ひとつずつ解放していけば、魔族の中でも噂になり、捕らわれている彼らも希望が持てるのではないでしょうか」

相手が魔族でなければ、王女様の言うようにひとつずつ解放して進むのも良かっただろう。しかし、相手は魔族だ。

そこら辺を全然わかってない彼女の言葉に米神を若干引き攣らせながらアイデアが言葉を返すべく口を開いた瞬間、大気が震えた。スピーカーやマイクの調整時に超音波が起きたような、そんな甲高いキーンとした音が耳の奥に響く。

「……結界か」

「転移防止の結界ですか。しかも支配地域全域に張るとは……」

「そうですね。お嬢さん、あなたの願いどおりにひとつずつ端から解放していかなければならなくなりました。お喋りをしている間に、連中が転移魔法を阻む結界を張ってしまったのでね」

アイデアの言葉を右から左に聞き流しながら、感覚を広げて世界を探る。見事にすっぽりと、自称魔王率いるはぐれ共が支配下に置いた町村が結界で覆われていた。

いくら俺の魔力と知識がチートでも、転移防止の結界をすり抜けて全員を転移させるのは無理だ。俺一人ならどうにでもなるんだが、そうすると残した四人が本性丸出しで追いかけてきそうだから止めておこうと思う。

しかし、転移防止の結界は専用の呪具か特殊な祭具もしくは相応の対価がなければ発動しない特殊な結界だ。そうそう呪具や祭具が転がってる訳もなし、自分本位で地上に飛び出した連中が人間を生かす理由もない。生き物、特に魔力を持った人間の血肉は、下手な呪具や祭具を上回る事がある。支配地域全域をすっぽり覆うほどの

結界を展開する為に、何人殺されたことやら。

イデアから聞かされた王女様や場の人間が蒼白になっているが、訳も分からず生贄にされた人間の方が気の毒だから同情してやる気にもなれない。生贄にされた人間にしても、元は同じだった筈なのに「災難だな」としか思えないというのに……。

こんな形で自分が人間から遠ざかってるって言うのを自覚するはめになるとは思わなかったな。

「ちんたらやってる場合じゃなくなったな」

「ええ、そうですね。あの結界は徐々に効力が薄まります。強める為には再び生贄が必要になる。専門の呪具や特殊な祭具があれば生贄など必要ありませんが、そんなもの早々転がってませんからね」

「これが人間同士の争いならば勝手にやっていると言うところだが、情けない事に同族だからな。これ以上恥をさらされては情けなくて陛下に顔向けできない」

「まったく、結界ぐらい自分の血肉で張ればいいものを。魔族の血肉なら三人もいれば人間の命を取る必要もないだろうに」

非常に思うところがあるようで、レジフ、イデア、アースラ、アデイスの順に物凄く嫌そうな顔で呟いている。元は俺が好意的だからだったんだろうけど、迷い込んできたり逃げてきたりした人間や亜人、ハーフに接してるうちに随分丸くなったもんだ。

特にイデアはエレノアと言うハーフェルフの妻がいる分、生贄を使って結界を張った馬鹿共の行為に嫌悪を感じているらしい。背後に再び大魔神が見える。

それを背負ったままにっこりと笑みを向けたものだから、気の毒な若い神官二人が気絶した。かなり痛そうな音を立てて石畳の床に倒れたんだが、大丈夫なんだろうか、あれ。

「と、言う事ですので端からひとつずつ潰していくことにします。」

ああ、ちゃんと自称魔王の首級は持ち帰りますのでご安心を。陛下、申し訳ありませんが結界の手前まで転移をお願いいたします」

「……ああ」

流石の魔大公でも複数人を一度に転移させるのは相応の手段を踏まないと無理らしい。やっぱり俺の設定はチートなんだなと再認識した。

しかし、この魔法陣の発動に再び待ったを王女様がかけてきた。一分一秒でも惜しいってわかんないかね、このお姫様は。

「……今度は何です？まさかと思いますが、勇者として宣誓した後、華々しくこの国を出立しろとか言うんじゃないでしょうね？もしそうなら即刻父親諸共王座を返上する事をお勧めしますよ。先ほど申し上げたとおり、現在自称魔王の一派が張った結界は時と共に効果を薄れさせ、その都度補強の為に人間が殺されます。呑気にとことこ移動してる暇がないと言うのはお解かりいただけたと思ったのですが？」

物凄く少ない息継ぎでアイデアが言い切った。こっちは見えないうが、絶対に目が笑ってない表面だけの笑顔だっただろう。王女様、引き攣ってるし。あ、騎士服の男が倒れた。

「本来であれば、この国の民の明日は我が身かと言う思いを払拭する為にもそうしていただくところです。ですが、一刻の猶予もならないと言う事は理解いたしました」

「では、何故止めたのです。こうして言葉を交わす時間すら、本来なら惜しいと言うのに」

「申し訳ありません。ですが、勇者様……いえ、魔王陛下にお願いがあるのです」

必然的に魔大公全員を視界に入れなければならない位置に立っている俺を、王女様は真っ直ぐに見つめてきた。この短時間で四人と俺への耐性がある程度つけたらしい。意外と順応力の高いお姫様だ。強い意志を感じさせる眼差しで俺を見ていた王女様は、自分を連れて行ってくれとのたまった。順応力が高いんじゃないかと現実を理解出来てないの間違いだろうか。

「現実が理解できていないわけでも、安っぽい英雄譚に酔っている訳でもありません。拙くはありますが、治癒と防御の魔法の心得がございます。解放した町村で、治癒が必要になる場合もある筈。無理に出しゃばる事は致しません。足手纏いにもならぬよう精一杯努めます。なにとぞ共にお連れ下さいませ」

さっきのアイデアに負けず劣らず、短い息継ぎで土下座せんばかりの勢いで王女様は願ひ出る。君の背後で父親兼王様が死にそうな顔になってんだけど、いいのか？あれ、放っというて。

別に連れて行く事に問題はない。何人だろうが俺の魔力なら運べる。ただ、面倒をきっちり見れるかと言われると微妙なところだ。俺も相当感性が人間のそれから遠ざかってるし、アイデア達は見下したり否定的でこそないものの、基本的に自分達に直接関わってくる地上の生き物以外に関心が薄い。

馬鹿共討伐に乗り気なのは、連中が俺の命令を堂々無視した挙句に魔王を名乗ってる事が腹に据えかねたのと、魔界に定住している元地上の住人がかつての友人や隣人、国の行く末を案じたり嘆いたりしているからだ。

「……………確かに魔族の私達よりも、人間でしかも王族のあなたがいれば色々些細な問題が片付きそうですね。しかし、本当に自衛できますか？先に言っておきますが、私達にあなたを護衛する義務はこれっぽっちもありませんよ？」

「存じております。短時間ではありますが、絶対防御の結界も発動が可能です」

「では、不用意な単独行動は控えてください。もし別行動の必要があるならその都度報告を。場合によっては私達四人のうちの誰かと別行動してもらいう事もあるかもしれません」

「承知いたしました」

「それと、確率は限りなく低いと思いますが仮に乱戦に巻き込まれた場合は陛下のお側にいてください。陛下は優しく強いお方ですから、余程無作法をしない限り守ってくださるでしょう」

決意に満ちた顔で頷いた王女様に、アイデアが言い添える。いやまあ守る事に異論はないけどな。元々多重結界が常時展開されてるからその範囲をちよつと広げればいいだけだし。

だから、確認するのは別の事。じつと真っ直ぐに王女様を見据えて、問いかけた。

「覚悟はあるか？」

「……………ございます」

「……………ならいい」

きちんと覚悟を決めての行動なら、俺がとやかく言う事じゃない。少々魔王としての気迫を乗せた問いかけに、彼女は少し詰まったもののきちんと返事を返してきた。生半可な覚悟では、答えることはおろか意識すら保てなかっただろう気迫に、耐えてみせた。

その姿勢に笑みが浮かぶ。魔大公四人も感心したような顔をする中、無言で展開させた転移の魔法陣を発動させる直前、一名の飛び入りがあった。

四話（後書き）

色気もそつけもなく旅立ち
誤字脱字があればご一報を

五話（前書き）

気をつけないと話が駆け足になってしまう今日この頃です。

五話

現在地は魔族が支配しているせいかな、どことなく鬱蒼としている森の真っ只中。

同族の気配がすると嬉々としてアースラは居場所を探っている。おろおろしている王女様と俺の視線の先には懇々と説教をかましている魔獣王。ちなみにアデイスの目の前には騎士服の女性がちゃんと正座して縮こまっている。

「転移の発動直前に飛び込んでくるなど、無茶にも程がある。たまに陛下が展開されていた魔法陣の定員が満員でなかったから無事だったものの、一歩間違えば挽肉でこの場に落ちた可能性もある。最悪の場合、我等全員、異界に飛ばされたり時空の狭間に閉じ込められていてもおかしくはない」

詳しく聞けばこの女性騎士、王女様の護衛騎士らしい。剣を捧げた主人を単身敵地へ乗り込ませるわけにはいかないと言う思いで転移の魔法陣（発動直前）に飛び込んできたんだとか。

そして現在、気概は認めるが無茶をするんじゃない、と常識人アデイスによる説教が行われているのである。イデアは自分がやろうと思っていた事をアデイスにやられてしまっているので手持ち無沙汰に周囲を観察しているし、レジフは完全に傍観を決め込んでいる。

「あ、あの……」

「……アデイス」

「以後、発動直前の魔法陣に迂闊に飛び込む真似はするな。捨て身の敵対行動と取られても文句は言えぬ行いだ」

「はい、軽率でした。……申し訳ございません」

王女様の何とかしてくださいと言う眼差しを受けて、アデイスを呼ぶと溜息ひとつで説教を締め括ってくれた。流石にそろそろ移動しながら現状を把握していかないと、いきなり襲われたら俺達とはとなく王女様がパニックになりかねないしなあ。

説教されてた騎士の方も、アデイスが理不尽な事を言っているわけじゃないとわかっているようで神妙な顔で頭を下げている。

「陛下、東の方から同族の気配がします」

「……行くか」

「恐れながら陛下、先行をお許しただけですでしょうか？」

「血の匂いがあるな。陛下、私も先行許可を頂きたく」

「許す、行って来い」

『はっ！』

一礼した後、二人の姿が一瞬で消えた。

転移は無理でも、個々の移動方法まで封じられたわけじゃないから、きっと1分もしないうちにアデイスとアースラは馬鹿共の一部がいる村につくだろう。

アデイスは四足獣の姿で力強く大地を蹴り、アースラは無数の蝙蝠もしくは薄い霧となって空を舞う。間違はなく、俺達がつくまでに制圧は終了する筈だ。何せ魔大公が二人も向かったんだから。

「お二人は大丈夫でしょうか？」

「問題ありませんよ。むしろ負けた方が大問題です」

「三下の同族程度に不覚を取るようでは魔大公は名乗れん」

「その通り。あなた方にも分かりやすく例えるなら、現役で名の知れた騎士団長が入隊したばかりの一兵卒に負けるようなものです」

「しかし、その一兵卒が実力を隠していた……と言う事もあるので

は？」

「地上でならあり得るかもしれませんが、魔界では、特に同族間ではまずありません。何故なら、一族の王はあなた方と違って世襲制ではなく実力制ですから」

イデアの説明に、レジフが無言で頷く。

王女様と女性騎士（いまだに名前がわかってない）は、不思議そうな顔をしていたが、二人とも即座に理解したようだ。頭の回転も悪くないらしい、とイデアがなんだか満足そうに口元を緩めている。連れては帰れないけど地上にも理解者増やしたいって所だろう。今のままじゃエレノアや他の元地上の住人に里帰りもさせてやれないからな。エレノアはいらんと言いそうだけど。

「ご理解いただけたようですね。そうです、一族の王を倒す実力があるのなら、魔族は迷いなくそれを示します。何故なら、王を倒した者が次の王ですからね。例外は陛下だけです」

「では……あのお二人も、王でいらっしゃるのですか？」

「そうですよ。アデイスは魔獣王、アースラは吸血鬼王です。二人とも自分の一族の者の暴挙に怒っていましたから、今ごろ容赦の欠片もなく暴れている事でしょう」

「自業自得だ」

敵地に踏み入っている筈なのに遊山でもしているかのような、ゆっくりとした歩調で歩きながらの会話だ。先行した二人が随分張り切っているらしく、進行方向から感じる魔族の気配が次々減っているし、周囲にも魔族の気配はない。

転移を阻む結界の支点——連中の本拠地を中心に張られている結界を支え、広げる役目を持った道具が破壊されるのを待って転移しても良いのだが、突っ立っているだけなのは王女様達が納得しなさそうだからゆっくり歩いている。

木の根に足をとられて転びそうになった王女様を咄嗟に支えて、改めて飛び入りでついて来た二人の服装を眺める。アイデアとレジフも同じ事を考えたようで、特に男女問わず戦いの心得がある魔竜のレジフはあっさりそれを口にした。

「今更だが、戦いには不向きな服装だな」

「そうですね。時間がなかったとは言え王女様はドレスのままですから、こんな森を歩くのに適した服ではありませんね」

「騎士服も儀礼祭典用の見目重視のものだ。実用品ではないな」

ぱっさりと言い切られた二人は小さくなっている。確かに王女様のドレスも騎士の礼服も戦闘には不向きだ。不向きって言うか確実に汚したらマズイ服だと思う。

今更帰す訳にもいかないし、本人達は汚れてもかまわないと言い張っているが、国王以下お偉いさん方は非常にかまうと思う。ふむ……女神様が移してきた力を一摘みて所か。やりすぎませんように。

出来うる限りの注意を払ってパチンと指を鳴らす。光の風が王女様と騎士を包み、風が消えた後にはすっかり服装の変わった二人がいた。よし、成功。

王女様の服は、裾を持ち上げないと地面に引き摺ってた華やかなドレスとハイヒールから、動きやすいズボンと上着と靴に。所々に施された刺繍が見た目の質素さを打ち消している。柄の長い杖はサービスだ。

騎士の服は、礼服から実用性のある衣服に。と言っても、重い金属鎧は人間より素早く力も強い魔族を相手取る時は不利だから、上下どちらも布と革と細い鎖を編んで作られたもの。こっちも王女様のと同じく、控えめな刺繍が入っている。腰の剣は使い慣れた物が一番だろうから、変えてない。

変わっていいようにまいと、武器も防具も女神の加護つきだ。確認してから魔王の守護も上乘せしておいたから、中級魔族の攻撃や魔法は油断しなければ無傷ですむだろうし、騎士の腕前次第では中級魔族を倒す事も出来るかもしれない。

「随分奮発されましたね、陛下。女神の加護の上に陛下の守護ですか」

「……人の身は脆い」

「確かに、自己防衛に徹する分には十分すぎる装備だな」

上から下まで二人の新しい装備を見たアイデアとレジフの感想だった。突然の装備変更に目が点だった当事者二名も、即座に自分の装いを確認して驚愕した後、物凄く丁寧な礼を言ってきた。純度100%の善意じゃないから、そんなに感動されると居心地が悪い。

「……終わったみたいだな。チツ、手抜きなしか」

「流れてこられても困りますよ、レジフ。戦えなくてつまらないのはわかりますが、あからさまな舌打ちはやめなさい」

不意に、進行方向から常に感じていた闘争の気配がなくなった。ほぼ同時に、周辺の転移を阻む結界も消える。どうやら支点を壊したらしい。これで転移で村まで行けるようになった。

無駄に体力消費させる必要はないから、村までの距離を確認してから転移の魔法陣を展開する。不思議そうに首を傾げる二人には、アイデアが説明してくれた。納得が得られた所で、発動。

ちゃんと村の入り口に到着した俺達を待っていたのは、苦虫を大量に噛み潰したような顔のアースラだった。

五話（後書き）

一つ目の村、解放。

魔王様は部下が優秀すぎるので転移係になってます（笑）
そのうちちゃんと活躍させたいなあ。瞬殺だろうけど（苦笑）

六話（前書き）

ずいぶん間が空いてしまい、すみません。
ご無沙汰しております。

六話

ざっと見た限り、家や畑などに被害はなさそうだった。人的被害は流石に住人に聞かないとわからないが、血の匂いが現在進行形で濃く漂っているから多分怪我人がいるだろう。

「……被害は？」

「怪我人は村で一番大きなあの建物に。王女と、治癒魔法の心得があれば騎士にも応援を頼みたいとアデイスが。イデアは我等の説明を頼む」

「わかりました。その様子では、陛下でなければ解決できない問題があったようですね」

「ああ。全く、吸血鬼族の恥さらしいところだ、あの痴れ者め。最初にわかっておれば楽になぞ殺してやらなんだものを……」

アースラが冷気を大放出する前に、卒なくイデアとレジフが王女様と騎士を連れてってくれた。いくら女神の加護と俺の守護がかかっている装備をつけてるとは言え、吸血鬼王の放出する冷気を直接くらうのはマズイ。特に王女様。

俺は若干ひんやりする程度にしか感じないが、咄嗟に遮断はしたから拡散はしなかったもののアースラ周辺の植物には霜が降りていた。相手によっては心臓発作とか起こしかねないからなあ、魔大公の気迫は。

中てられて妙なもんになられても困るから、女神様から与えられた力で焼却しておく。

「何があった？」

「こちらへ」

先導するアースラについて行った先にはこじんまりとした木造の家。一見普通だが、魔力の流れを注視すると家を取り囲むように封じの魔法陣が隠蔽つきで敷いてあった。この形式は……吸血鬼が同族を拘束する時に使用する、施した本人以外の出入りを防ぐ物じゃなかったか？

視線を向けた先でアースラが非常に渋い顔で頷いている。どうやら俺の見立ては正しいらしい。

「な、何しに來たんだよ!？」

「喚くな、小僧。貴様の姉が取り返しがつかなくなる前に治せるやもしれぬお方をお連れしたのだ。尊きお方への無礼は許さぬ」

「……アースラ、脅すな」

結界で覆われた家に入ると、小さな少年がアースラにくっついてかかっていた。勇気ある少年だな、おい。って、こらこらこら、威嚇するとか大人気ないにも程があるぞ、アースラ。気の毒な少年が今にも気絶しそうじゃないか。

固まってしまった少年を無視して、アースラが近くのドアを開ける。同族を封じる意味を持つ呪文を魔力で具現化した鎖に覆われて、一人の女性が力なくベッドに横たわっていた。

カーテンの締め切られた室内と、青褪めて血の気の感じられない顔。そして、微かに感じる吸血鬼特有の魔力の波動。

「仮契約か」

「はい。恥知らずが一名、己の血を分け与えた上に術をかけ、隷属させようとしていたようです。術はまだかけられてはいませんが、血は与えられてしまっていて、私では手の施しようがありませんで

した」

面目次第もございません、と悔しげにアースラが頭を下げる。

吸血鬼一族は、他の魔族と違って自身の血を分け与える事でも同族を増やす事が出来る。元々他の三種族に比べたら生殖能力が低いから、種の数を保つ為に得た能力らしい。血に含まれる魔力の濃度を意図的に上げて、与えた相手を同族に変質させるんだそうだ。

だから、吸血した相手に血を飲ませる事。たったこれだけで、吸血鬼は数を増やす事が出来る。血中の魔力濃度を上げるのは何気に気力と魔力を大量消費するから、ある程度の実力がないとそうほいはい出来ることじゃないらしい。

ちなみに吸血されただけじゃ吸血鬼にはならない。貧血を起こさない程度に留めるのが普通で、吸い尽くして死なせるのはただの馬鹿だそうだ。アースラ曰く。

ともかく、吸血され血を飲まれた人間は、血を与えた吸血鬼と同等もしくはちょっと弱いぐらいの吸血鬼になる。同族間での扱いは伴侶もしくは子供。一度に大量の魔力を含んだ血を与えて一気に同族にする方法と、少量ずつ何度かに分けて与えてゆっくり変化させる方法があるらしい。

血を分け与える途中で長い吸血鬼一族の歴史の中でも最低の禁じ手といわれる術をかけ、同等の存在ではなく自分の奴隷にしてしまうのが隷属の術だ。隷属させた人間をどれだけ連れてるかが吸血鬼の格を現す、とか言われた時代も遙か昔にあったらしいが、アースラの二代前の吸血鬼王が禁じ手としたらしい。アースラも隷属の術反対派だ。

「二代も前の吸血鬼王が破棄したからと、油断しておりました。よもやこの術を使用しようとする愚か者が出るとは……」

「年嵩の者か？」

「いえ、若輩も良い所の若造でした。陛下が御着きになる前に、禁忌となった術の現在の扱いと同族への閲覧状況がどうなっているのか調べるよう部下に通達をだしました」

「そうか」

若いけど術を扱うだけの実力があつたのか……それともたまたま術の事を知って、好奇心の赴くまま試そうとした大馬鹿野郎か……後者な気がするなあ。まあ、どっちでもいいけど。

しかし、四種族それぞれに禁じ手とされた術とか色々あるんだよな、確か。魔界の歴史も長いから黒歴史もそれなりに積み重なつた筈。地上でのごたごたが片付いたらイデア達と相談してそう言う禁忌系集めた建物でも作ってみるかね。城の敷地内で、鍵は俺の魔力で構成するようにしとけば俺の許可がなけりゃ誰も入れないし。ま、戻ったら提案してみるか。

「術はまだ、と言ったな？」

「はい。魔力濃度の引き上げも満足に出来ぬ若輩だったようです」

アースラがこの女性の弟だと言う少年から聞いた話では、最低の術を使おうとしていた馬鹿は二週間も前からちまちま血を飲ませに通っていたらしい。

身の程知らずの若造が、とボソツと呟いたアースラの言葉はぼちり聞こえた。気持ちにはわかるが落ち着け、アースラ。

苦笑しつつ、アースラが張っていったらしい封じの結界を解除する。魔大公の魔力は強いから、封じられている彼女の中の吸血鬼の魔力が隠されてしまつて読み取り難い。

解除した事で女性がカツ！と目を開いたけど、俺とアースラと言う遥かに格上の魔族がいるから動けずにいる。

遺伝子や細胞に影響を与えている魔力の流れを読み取って、魔王

の知識からどうすれば穏便に彼女を元に戻せるかを引っ張り出す。完全に变化していたら流石に戻せないが、実行犯が実力不足で変化途中だったのが幸いした。これなら魔王の魔力と女神様に押し付けられた力で元に戻せる。

「……戻せますか？」

「ああ」

横たわる女性の上に手を翳して魔力で包む。体内で変異を促している吸血鬼の魔力を俺の魔力で覆って圧縮、更に変異させられた箇所を女神様から押し付けられた力で元に戻しつつ翳した手を顔の方へ移動させていく。

仰け反って大きく開かれた女性の口から、親指の爪ぐらいの大きさの赤い球体が出てきた。翳していた掌の上に浮かぶそれは燃やしておく。とっという間でも使い道なんぞない。

「目覚めれば元に戻っているだろう。……アースラ、入れてやれ。姉を心配している」

「陛下のお邪魔になるやもしれぬと思いましたので……小僧、お前の姉は治った。目覚めれば元の姉であろうよ」

ちゃっかりドアの前に陣取って、少年が入ってくるのを妨害していたアースラがしれっとしながらドアを開けると、転がるように少年が飛び込んできた。どこまでも上から目線なアースラの言葉に信じられないと言った風に目を見開き、血色の良くなった自分の姉に恐る恐る手を伸ばす。

容赦のないアースラが閉め切られていたカーテンを一気に開くと、少年の手が姉の頬に触れるのはほぼ同時だった。狙ってやったな、アースラ。

「姉ちゃん……治ったの？」

「そう言っているだろうが」

「そ、か……姉ちゃん、治ったんだ。あいつの仲間に、ならずに済んだんだ」

力が抜けたように姉の眠るベッドの傍らに少年が座り込む。うわ言の様に呟かれた言葉に不快そうに眉を寄せていたアースラは、次の瞬間火がついたように泣き出した少年にぎよっとした顔になった。ああ、吸血鬼一族には少年ぐらいの子供いないし、こんな風に感情露に泣き出したりしないもんなあ。どう対処したらいいのかわからず、オロオロしているアースラは非常に面白い。

緩い眠りの魔法で、恐らく姉の身を案じてこの二週間ろくに寝てないだろう少年を強制的に寝かせて家を後にする。流石に家主二人が眠っている家に居座るわけにもいかない。

イデア達がいる村で一番大きな建物に行くと、きちんと説明が為されていたらしく、村長だと言う初老の女性がやや硬い表情ながら真っ直ぐに俺とアースラを見て頭を下げてきた。他の村人が遠巻きにしているのは、まあしょうがないだろう。幾ら村の恩人とは言え、こっちも魔族なのだから。

六話（後書き）

最強メンバーなので本当に一瞬で終わってます。
今回は魔王様が働ける場面がありました！（お）
見えない所で王女様も頑張ってます。

七話（前書き）

久々の短期投稿……。
不定期更新にお付き合いくださっている方々、本当にありがとうございます。
（ぺこり）

七話

村人の対応は王女様と騎士に任せ、森の中で新しく転移できるようになった場所に一番近い人里はどこかを探る。レジフは木の根元に座り込み、幹に背を預けて目を閉じている。眠っているようにも見えるが、単に目を閉じているだけだ。アデイスは村の子供達に懷かれていた。俺達の中で一番とつき易そうに見えるからだろう。実際、子供好きで面倒見良いしな。遠くに母親らしき人影が見えるが、魔族が恐ろしいのか寄っては来ない。

ちなみに子供が苦手なアイデアとアースラは甲高い声と足音が聞こえると同時に木の上に逃げた。レジフと違って纏わりつかれるだけでもダメだもんな、あの二人。しかしアイデア、いつの日かエレノアに子供が出来たらどうするんだろうか。

馬に蹴られたくはないから深く追求はせずに、結界の縁に一番近い支点がある場所を探していく。そう遠くない場所に二ヶ所見つかった。

片方はこと同規模の村だったが、もう片方は何故か荒野だった。村に駐屯しているのは魔獣族。荒野の方は魔竜族。魔竜族が暴れて村が荒野になった、とかじゃないといいんだが……。キレると一番見境なく暴れるんだよな、魔竜族って。>br<

「レジフ。結界の支点の側に、魔竜族がいる」

「……屠って来ても？」

「ああ。近くの村にも支点があるから、そっちも任せる」

「承知いたしました」>br<

魔竜族、のくだりでレジフの眼差しがかなり好戦的なものになっ

た。あー、肉食獣が舌なめずりしてる図が頭に浮かぶのはなんだろうなあ。レジフの足なら荒野から村までの距離は殆どないから、ついでにそっちも任せておく。>br<

立ち上がったレジフを転移で飛ばす。一人だけなら魔法陣の展開を省略しても問題なく飛ばせるから省いたのだが、そのせいで子供達の好奇心を刺激したらしい。今度はこっちが纏わりつかれるはめになった。子供は嫌いじゃないから別にかまわないが、そろそろ親元に戻した方が良さそうだ。さっきからかなりはらはらした様子でこっちを見てる。

渋る子供達にエレノア特製の、果汁で味をつけた飴玉を渡したら素直に親元に戻って行った。子供の身体に毒になりそうな魔力は抜いておいたから、中てられる事はないだろう。ちゃんと歯を磨かないと虫歯にはなるかもしれないが。

飴貰ったのゝ、と子供特有の可愛らしい声でそれぞれが親に報告している。なんか驚かれてるが気にしない。まあ魔族が飴なんて持ち歩いてるとは思わんな、普通。>br<

「あれはどこから出されました？陛下」

「以前試しに作った収納魔法の中」

「なるほど。確か鮮度も落ちない優れもの、でしたか」

「ああ。……ん、レジフが支点を壊したな」>br<

いまだに広げたままだった感覚が、結界の消滅を感じ取った。ついでにもんの凄くスッキリした顔のレジフも見えたが見なかった事にしておく。顔に出さなかっただけで同族の行動にかなり怒ってたんだな、あいつ。とりあえず、結界が消えた事でまた転移できる距離が長くなったのは良い事だ。出来るだけさくさく進みたいし。

そう考えつつ再び支点を探る。それと同時に、レジフの側にこっちへ帰還する為の魔法陣を出しておいた。レジフの魔力に反応して発動する設定にしておいたから、レジフ以外が飛んでくる事もない。

>br<

「……イデア」

「何でしょう？」

「レジフが転移範囲を広げた。次の支点の側には悪魔族がいる」

「是非飛ばしてください。愚か者共に我が一族を裏切った者の末路を骨の髄まで叩き込んで参ります」>br<

身軽に木の上から降りてきて、フフフフと再び大魔神の幻影が消える気迫を背負ってイデアが笑う。それでも地上と言う事に配慮してか周囲に垂れ流したりはしない。魔界と違って迂闊に垂れ流すと被害甚大だからなあ。イデアを転移で飛ばした後、気の毒だがイデアの至近距離に生えていた為に気迫に中てられた植物は焼却しておく。毒を噴出したり瘴気の元になったり、下手すると魔物になったりするからな。

暫くするとまた転移範囲が広がった。今度は魔獣族が支点の側にいたからアデイスを飛ばす。アースラはまだ木の上から降りてこない。流星に一度帰したから今日はもう来ないと思うのだが、黙っておく。

レジフが戻ってこないのが気になると言えば気になるが、魔力の波動は乱れてないから怪我とかではないようだ。残党かはぐれてた奴か、はたまた魔物を見つけて掃討でもしてるんだろう。しかし、地上の魔物は俺の影響で強くなった魔界の奴等と違って以前のままだから、魔界の魔物に慣れてるレジフには物足りないんじゃないかなろうか。

とか考えてたら漸くレジフが戻ってきた。のはいいが……隠れるように後ろにへばりついてる銀色の髪の子供が一名。その子から感じる魔力は、紛れもなく魔竜であるレジフとは正反対の聖竜のもの。何でかなり険しく標高の高い山の頂上付近に住んでるはずの聖竜の、それも幼生がこんな所にいるんだ？かなり距離があるぞ、住処の山からここまでは。>br<

「その子は？」

「同族を屠った場所の付近で見つけました。他種族と婚姻した母を追って山を出たそうです」

「……無謀な事を。母親は？」

「この幼子が言うには、大海を渡ってしまったそうです。本人は山に帰りたくないと言っていますが……どういたしましょう？」>b r<

竜族が意外と惚れっぽくて一度惚れたら一直線って言う魔王の知識は真実だったのか……頭いてえ。いくら他種族と結婚するからって明らかにまだ庇護が必要な子供を放り出して海を渡るか？普通。

「竜族の常識がわからん」と呟いたら「こいつの母の行動は非常識です」と返された。竜族の中でも非常識な行動だったらしい。置いていかれた子供は苦笑している。>b r<

「……戻らなくていいのか？」

「はい。母は、結婚を反対されて山を飛び出しました。そんな母を追いかけて山を出たんです。もう、山に帰る場所はありません」

「そうか。……事が終われば俺達は魔界に戻るが、来るか？」

「連れて帰るんですか」

「放っておく訳にもいくまい。どうする？」>b r<

屈みこんで問いかけると、驚いた顔で子供は俺を見て、レジフを見て、また俺を見た。瞳孔が縦に長い檸檬色の目が大きく見開かれている。上達すればこういう細かい所もちゃんと人間らしく化けるようになるらしいが、幼生の頃は大抵、目を見たら判別がつく。

行くと言い切った子供の面倒はレジフに丸投げしておいた。同じ竜族だから他種族の俺達が面倒を見るより細かい所まで配慮が出来るだろう。自分は魔竜だとか子育ての経験はないとか言う苦情は聞こえないフリを貫いておく。どう見たってその子はレジフに懐いてるんだから、わざわざ引き離す必要はない。

ずっと黙殺し続けていたら諦めたらしく、溜息交じりにレジフが一度魔界に戻ると言ってきた。流石に子連れで自称魔王の所まで乗

り込むわけにもいかないしな。了承して、魔王城への直通回路を開く。ちよつと見た目がアレだから怯えられてしまったが、レジフは頓着せずに聖竜の子供を小脇に抱えて飛び込んだ。悲鳴を飲み込んだような声が聞こえた気がするぞ、レジフ。

エレノアに預けて即座に戻ってくるつもりらしいレジフの為に、直通回路は閉じないでおく。その間に、村から王女様と騎士がやって来た。ほぼ同時にアースラも漸く木の上から降りてくる。>br<

「あら、他の方々はどうされたのですか？」

「……アイデアとアデイスは他の村を開放に。レジフは一度戻った」>br<

内側が色々と混ざったやばそうなマール模様の直通回路を示すと、途端に二人の顔が引き攣った。微妙に直視しないようにしている。やっぱり内側のマール模様は刺激が強すぎるらしい。今度暇な時にでも変えられるか試すでしょう。

七話（後書き）

今回は転送係な魔王様でした。優秀な部下がいるので任せまくってます。

後、何気に魔王様は甘党ですw

感想で、魔王様は魔王様をどう思ってるのか、と言うご質問を頂きました。

そのうち番外編で突撃インタビューとかしてみようと思います。気長にお待ちくださいませ。

八話（前書き）

珍しく筆がのつてます。

この調子で自称魔王討伐編最後まで行きたいなあ。

八話

アイデアとアデイスが戻ってきたところで解放してきた村に怪我人がいたかどうかを確認して、治癒魔法が必要な程の怪我人はいないみたいだったから王女様と騎士を魔力で作った馬車に押し込んだ。

加護つきの防具を身に着けてるとはいえ、流石に人間の身でひよいひよい転移を経験しまくるのは負担が大きい。魔族でも多用すると乗り物酔いに近い症状からばったり気絶したりと言う症状まで幅広く起こる。馬車って言う空間ごとの転移ならさほど負担はかからないからな。軽減効果もかけといたし。

馬車の中は空間を弄って無駄に広くしておいた。ソファにテーブル、続きの部屋には寝室や浴室がある。人型の使い魔を話し相手兼世話係としてつけたから、不自由はしてない筈だ……多分。

ちなみに馬車を引いてるのも使い魔。真っ黒な体毛の馬型の魔物だ。足の関節から下は青っぽい靄になっていて、空に浮かんでいる。そこそこ力のある魔物だから何気に護衛でもある。何せ雷系の上級魔法使えるからな、こいつ。>br<

「陛下、この先に町があります」

「少し急ぐか。支点を複数破壊した事で結界が薄まりだしている」

「我等が先行いたしましょうか？」

「……いや、俺が行く」>br<

陛下！？とか言う驚きの声は聞かなかったことにする。

流石に俺もここまで馬鹿な真似をしまくってるとは思ってなかったから腹は立ってるのだ、それなりに。だから、俺が続べ、守るべ

き民であろうと、否、だからこそ余計に、魔大公達に任せっきりは出来ない。

召喚された直後にざっと見た限り、次の町を解放すれば後は連中が本拠地に行っている城と城下町だけだ。本当は城下町の方で思いつきり力を振るおうかと思ってたんだが、結界が薄まりだしてるから次の町の魔族を脅しかねてさくっと殲滅してしまう事に決めた。

転移を阻む結界など張るだけ無意味だったと、知ればいい。自覚して、無闇に人間を殺すのをやめてくれればもったいい。>br<

「先に行く。馬車を守って後から来い」>br<

通常の転移よりやや大目に魔力を消費して無理やり転移防止の結界が張られている町の上空に飛ぶ。結界の揺らぎと、いきなり転移してきた俺への驚愕が空気中の微量な魔力を伝って届いた。

祭具も、魔具も、大仰な儀式も、呪文すらいらぬ。

ただ向かう先を決定した魔力を放つ。それだけで、町中から感じ取れた魔族の気配が殆どなくなった。

避けれる實力を持った奴がいたのかと思いつつ閑散とした大通りに下りる。

完全には避け切れなかったのか、あちこちに裂傷を負った悪魔族と魔獣族と、無傷の魔竜族が物陰から出てきた。>br<

「……これはこれは、まさか魔王陛下直々にお出ましくださるとは」

「お前達の所業、目に余る」

「おや、余りましたか」

「最初に命じた筈だ。『人間を害する事は許さん』と」>br<

魔王の座についてから操れるようになった殺意を眼差しに乗せれば飄々としていた悪魔族の顔が苦痛に歪んだ。魔王の殺意に耐えるのは中級魔族には厳しかったらしい。

そのまま軽く手を振るえば魔獣族と仲良く一緒に吹っ飛んでいく。民家の壁に当たる直前に、二人の身体は燃え上がり、一瞬で塵になった。

それを見届ける事無く無傷の魔竜族に視線を向けて、俺はちよっ

と首を傾げた。魔力の質からして高位魔族みたいだから、無傷なのは全て避けたか防御したからだろうと思ってたんだが、どうやら俺の魔力が対象外と判断した結果のようだ。魔力の残滓すら感じられない。>br<

「……お前、人間を傷つけていないのか」>br<

ぽつりと呟いた言葉に、魔竜族の男が軽く目を見開く。俺も驚いたけど、相手も十分驚いたみたいだ。

上空から俺が放ったのは『悪意を持って人間を害した魔族』を標的とした魔力の矢。それが掠りもしてないと言う事は、こいつは俺が指定した標的ではないって事だ。

魔王の特性なのか魔力が強すぎるからかは知らないが、俺が自分で指定して魔力を使った場合、誤作動は起こらない。やりすぎる事は多々あるけどな。>br<

「……何故」

「上空から放った矢は、悪意を持って人間を害した魔族を標的に設定してあった」>br<

向こうに敵意がまったくないし、最初に俺の魔力が標的外と判断して倒す必要性を感じないから俺は普通に相対してたんだけど、やっぱり魔王と相対し続けるのは精神的に厳しいんだろうか、魔族の男は物凄く居心地が悪そうに視線をあちこちに飛ばしている。

こいつの他にはもう魔族の気配はなかったし、アースラ達が追いついてくるまでまだ時間があったから反応を待ってたんだが……何故か現在ちびっ子達に睨まれてます。

どう見ても人間の子供達がわらわら寄って来て俺と魔族の間に割って入ったのだ。小さな背中に庇われてる形の魔族の男が非常に焦っている。>br<

「……好かれているな」

「そ、んなことは……」

「お兄ちゃんを苛めちゃダメ!」>br<

一番背の高い女の子の言葉に、俺は思わず噴出しかけた。魔族

の男は蒼白で固まってるし、近くの屋内には大人もいるようでちらほら動揺してる気配がある。

現在進行形で睨まれてるからその台詞もわからなくはないが、随分勇気があると言うか無謀な子供達だ。俺だから良かったものの、自称魔王の配下だったりしたら出てきた途端に弔り殺しにされてもおかしくはない。そう言う事を、平気で笑いながらする連中だ、あいつらは。>br<

そんな連中と、どう見ても子供達に好かれている目の前の男がどうしても繋がらない。弱味でも握られて無理やり仲間に取り入れられてたとか、そんな感じだろうか。

八話（後書き）

実は結構キレてた魔王様。

ちなみにこれ、まだ召喚当日ですw
素敵に無敵な魔王様ですからw

九話（前書き）

ややありがちな展開になっちゃった気が……
精進いたします。

九話

「お前、名は？」

「っ！？わたし、は……」>br<

ほんの少し、興味がわいた。地上に出てる魔族連中は、全員もうどうしようもない馬鹿ばかりだと思ってたから。だから、目の前にいる魔竜族の男に、興味がわいた。

名前を問えば、驚かれる。まあ無理もないか。俺がここにいるのは地上で馬鹿やってる奴らを粛清する為だし。こいつもきつと問答無用で消し飛ばされるのを覚悟してたんだろうし。

そう考えながら、答えを待つ。俺が何もしないとわかったようで、警戒心を剥き出した子供達はまだ魔竜族の男の側に寄り添っているものの、こちらを睨んだりはしていない。>br<

「何をしている？ギィラス」

「！レジフ様」>br<

本人が名乗る前に、レジフ達が追い付いてきた。ふうん、ギィラスって言うのか。

一族の王の登場に、ギィラスは驚いて俺とレジフを交互に見ている。何だか焦ってるように見えるのは、足元に纏わりついてる子供達がいて跪けないからだろうか。>br<

「……レジフ、こいつは問題ない」

「どう言うことです？」

「ギィラスは、悪意を持って人間を害した事がない。俺の魔力が標的外と判断した」>br<

そう告げると、レジフはギィラスを見て、周囲で警戒してる子供

達を見た後、無言で俺の後ろに下がった。納得したらしい。

馬車から降りてきた騎士がギィラスを見て一瞬警戒したものの子供達の姿を認めて不思議そうな顔になっていたり、同じく執事然とした使い魔の手を借りて降りた王女が似たりよつたりの反応をしたりと、このままだと収拾つかなさそうな気がするから、とりあえずこの町の代表者の所に連れてってもらうことにしよう。>br<

ギィラスの先導で町長の家に着く頃には、王女や騎士だけでなくレジフやアデイスの周囲にも子供達が引っ付いていた。アイデアとアースラの側にもたまに寄っていくが、少しの応対で苦手だとわかるらしく長居はしていない。

俺の側にも微妙に寄っては来るんだが……何故か全員話かけてくる前にギィラスが回収していく。子供は嫌いじゃないからそんな大慌てで呼ばなくても何もしないんだけどなあ。>br<

案内された長の家の前に、人影があつた。

ギィラスを見つけてパツと顔を輝かせたかと思うと、長いスカートをはいっている事をものともせず駆け寄ってくる。

ああ、これは、あれか？異種族間の相思相愛を馬鹿共に利用されたとか言う、そう言うケースか？とか思ってたんだが……うん、正直言って度肝を抜かれました。>br<

「おじい様！」

「セシエル。何故ここに」

「見張りの魔族がいきなり光の矢に貫かれて消滅してしまつて、おじい様が仰っていた本物の魔王様がお越しになったのだとおば様が。それで、私いてもたってもいられなくなつてしまつて……」>br<

相思相愛は相思相愛でも既に夫婦だったらしい。しかも孫までいるとか。

どうやらレジフも初耳らしく、滅多に動かさない表情筋を目一杯使用して驚きをあらわにしている。珍しいもん見た。

「レジフ、顔が面白い事になっていますよ」

物凄く珍しいレジフの表情はアイデアの一言で元に戻った。

セシエルと呼ばれた女性は、そこで漸く俺達の存在に気づいたらしい。やや顔を赤らめて、緊張気味にはあったが綺麗な所作で一礼してきた。彼女の父親がハーフで、彼女自身はクォーターらしい。魔竜族の血がかなり薄まっているからわからなかったようだ。

家の中に入ると、ピンと背を伸ばして真っ直ぐに立っている威厳のある老女がいた。俺達に一礼したギィラスが、彼女の傍らに静かに立つ。

「ようこそ、おいでくださいました。わたしは町長のミランダ・ラーズウェルです」

「先程は失礼いたしました。お初にお目にかかります。町長の孫娘、セシエルと申します」

「私はフォルキス神聖王国第一王女のリーズ・アクル・ヴィラ・フォルキスですわ。今回、魔王様に無理を言って連れて来てもらいましたの。こちらは私の護衛騎士、アルマダ・スフィア」

王女の名乗りに、全員がギョツとして俺達を見る。誘拐した訳じゃないからな。てか、漸く王女と騎士の名前がわかったな。リーズ王女とアルマダ女史か。覚えとこう。

彼女が説明した勇者召喚のくだりで有り得ねえって顔をされた。うん、気持ちわかる。普通魔王を勇者に選定したりしねえよな。

それから手短かに情報交換した結果、色々な事がわかった。

たまたまギィラスにミランダと言う人間の妻がいて、しかも彼女が町長を務める町の住民を彼が守っていると知った自称魔王一派が大挙して押し寄せてきて、協力しないと住民を殺すと脅したらしい。しかし、ギィラス自身が魔竜族の中でも力のある方だったから、住

民を一人でも傷をつけたら暴れるぞと逆に脅つけて町の人間の安全を確保したんだとか。

それぐらいいしか出来ず、結果として俺に背いてしまったと落ち込むギィラスをレジフが宥めている。

さて、今まで俺達は前魔王の息子が自称魔王だと思っていた。それはまあ間違いじゃないらしい。が、ギィラスが言うにはその息子もギィラス同様脅されて無理やり旗印にされてるらしい。

「……どう言う事だ？」

「前魔王の子息……名をヒューベルと言うのですが、あいつは俺の友人で、何度か一緒にこちらに赴いた事があるのです」

「人間に悪感情は持ってない、と言う事ですか？」

「俺と同じで気を許した一部の例外にのみ、ですが」

人間界の調理済みの食べ物とは魔界にはないものだから、二人はよく食べ歩きをしていたらしい。その時にギィラスはミランダと知り合って互いに一目惚れしたんだとか。ヒューベルの方も気に入った人間が出来ていたらしい。そして、だからこそ彼も、その人間の命を盾に旗印になる事を迫られたんだとか。

「……なるほど」

「どうなさいます？ 陛下」

「やる事は変わらん。俺の命に背き、地上で暴れた馬鹿共を一掃する」

ただそこに、無理やり旗印にされた前魔王の息子と、彼に対する人質を救出すると言う項目が新しく付け加えられるだけだ。

九話（後書き）

魔王様の活躍をスカッとしたと言って下さった方、ありがとうございます。

素敵に無敵にチートですが、揮い所がありません魔王様です。

まあ、あんまりありすぎても困るんですがw

十話（前書き）

調子のいい時にサクサク書いておくに限ります。

下り調子になると全然書けなくなるからなあ、私 O R Z

そしてまた魔王様が無双します W

十話

旗印となっっている前魔王の息子が、実は人質を取られ嫌々旗印にならされていると聞いてから一時間後。

俺と魔大公四人、それにリース王女とアルマダ女史は薄紫の膜に包まれている城と城下町が一望できる場所にいた。王女とアルマダ女史は移動用の馬車の中にいてもらっている。ここから先は本気で何があるかわからない。ギィラスがいないのは、ついて行きたいと言うのを町の防衛に置いてきたからだ。一応結界は張ってきたが、万が一と言う事もある。

「道中で随分片付けてきたが、やはり殆ど下っ端だったか。力のある者が残っておるな」

「そのようだ。しかし、規模に比べて人間の気配が少ないな。やはり贄にされたか」

「陛下、どういたしますか？」

「結界を壊しても、恐らく即座に補強すべく準備しているだろう。

先に排除する。……毒蝶の群れ、臓腑を溶かす鱗粉、害するは魔族、我が命に背く者共」

遠慮なく揮うのは女神から与えられた勇者の力ではなく、俺が継いだ魔王本来の物。こっちの方が慣れている分微調整がしやすい。

俺の言葉に反応して魔力が動く。毒を持つもの特有の美しさを持つ蝶の群れが、俺の影から次々に飛び出して城下町と城の方へ飛んでいった。程なくして、そこかしこで感じられた魔族の気配がひと

つ、またひとつと消え始めた。

「光の鳥、運ぶは癒し、捕らわれ人に安寧を。……鎮魂の雨、怨念をすすぐ、鳥の軌跡、来世への導き」

人間の気配はひとつの所に集まっているから、解放すべく今度は女神様から与えられた力を魔王の力と合わせて使う。勿論、勇者の力が多めだ。じゃないと威力が半減する。流石に魔王の魔力で光の威力を出すのは骨が折れるのだ。元々闇寄りだから。

「あの……魔王様は、何をなさっていらっしゃるのですか？」

「陛下ご自身のお力を用いて愚か者に裁きを与え、同時に女神から与えられた勇者の力で結界の礎にされた人間達の魂を浄化しているのですよ」

「捕らわれている人間達の解放もな」

動かない事を不審に思ったようで、馬車の窓を開けたリーズ王女が近くのアイデアに尋ねていた。わかりやすく答えているアイデアの言葉のアデイスが補足している。

数分もせずに、城と城下町からほぼ全ての魔族の気配が消えた。

「終わったようですね」

「そうなのですか？」

「ええ、気配が消えました」

行くぞ、と一声かけて城下町の入り口に転移する。

馬車から降りた王女と騎士は、慣れたもので馬車を引いていた馬型の使い魔や話し相手を勤めさせていた人型の使い魔に気さくに礼を言っていた。

しかしまあ、随分と荒れてるな。元々は綺麗な町だったっぽいの

に、かなり荒廃してて見る影もない。

「小なりとは言え、とても栄えた美しい町でしたのに……魔王様、何とかありませんか？」

「直そうと思えば直せるが、それをするのは住民の手がよからう」
「……そうですわね。申し訳ありません、我俣を申しました」

短期間しか一緒にいなかったが、随分とこの王女様は素直だ。いくら女神が勇者として選定したとは言え魔王だと言うのに、初対面に少し怯えられたぐらいで後は普通に接してきている。騎士のアルマダ女史もそうだが、神聖王国の女性は随分と強いらしい。

所々剥けている石畳を、寂れた風情の城に向かって歩いていく。城門の前に、人垣が出来ていた。捕らわれていた人間達だろうか。にしては、随分と表情が硬い。

「ナターシャ！」

「リーズ姉さま!？」

走り出そうとした王女はアルマダ女史に止められていた。うん、幻術とかじゃないけど、そう言う可能性もあるからな。俺としては、王女がナターシャと呼んだ少女の隣に立ってる魔族の少年が気になる所だ。

記憶違いじゃなければ、あれは前魔王の息子ヒューベル。片腕が何故かない少年姿の彼は、真っ直ぐに俺を見ている。緊張気味に見える彼を、ナターシャと呼ばれた少女だけでなく周囲の人間達も氣遣っている。まるで守るように周囲に立つ人間達に何事かを告げて、ヒューベルは迷いのない足取りで俺の数歩前に来ると片膝をつき、頭を垂れた。

「……お久しぶりです、陛下」

「ああ。……首謀者は何処にいる？」

「陛下の御前に」

「……言い直す。お前を首謀者に仕立て上げた奴は何処にいる？」

あの毒蝶は、臓腑を焼け爛れさせ、苦痛のうちに消滅するように生み出したが、ヒューベルを首謀者に仕立て上げた魔族だけは絶命しても消滅しないよう細工をしておいた。だからこそ尋ねたんだが、俺達がギィラスから事情を聞いているとは思ってない先代の忘れ形見は潔く自分だと名乗る。

聞き直したら、何故それをもって顔で見上げられた。反面、ハラハラと心配そうに俺達のやり取りを見守っていた人間達からは安堵の雰囲気伝わってくる。

「事情は魔竜族のギィラスから聞いています」

「そう、か……しかし、何故奴だけは消滅させなかったのですか？他の連中は跡形もなく消えましたが」

「陛下が神聖王国に勇者として召喚されてしまいましたね。自称魔王の首級が必要なのですよ、証拠として」

とか何とかアイデアが説明している間に、レジフとアデイスが見つけてきた。アデイスが苦虫を噛み潰した顔をしているのは、既に事切れてるとは言えそいつが魔獣族だからだろう。

パチンと指を鳴らす。一瞬で大柄な体躯が溶けるように消え、透明な結晶に包まれた頭部だけが残った。

「リーズ王女、勇者としての仕事は果たした。自称魔王の首級だ」

「はい。確かに確認いたしました。ありがとうございます」

「報せに戻るなら転移するが」

「……我俣をお許しいただけるならば、帰還は明日……いえ、明後

日まで延ばしていただけますか？」

荒れ果てた城と城下町、そこに住む友人らしい姫と人々が心配らしい。まあ、神聖王国の連中も一日で片付くとは思ってないだろうし、何日滞在しようが戻るのは一瞬だからな。

あっさり頷くと、断られると思ってたのかリーズ王女は嬉しそうに笑った。

なんか王女って感じあんまりしないんだよな、この子。少し、俺がまだ人間だった頃、幼馴染だった年下の女の子に似てるせいもあるかもしれない。あの子の笑顔も、こんな感じだった。

十話（後書き）

さつくりと自称魔王一行討伐完了しました。

もう1～2話ぐらい後処理とかがしたら討伐編は終了かなと思ってます。

次どうしよう……

十一話（前書き）

魔王様はどこまでも……

さあ、そろそろ討伐編終わらせないと。

十一話

リース王女の願いで神聖王国への帰還を明後日に延ばした俺達は、日が暮れるまでの間に出来る事を済ませる事にした。アデイスとレジフは馬鹿共が荒らした町の片付けの為に何人かと町に行き、俺は転移を阻む結界を作る為に殺された人達の埋葬を頼まれた。埋葬の仕方は国や地域で違いがあるらしく、神聖王国は土葬が基本だと王女は言う。が、この小国は火葬してから焼け残った骨を共同墓地に埋めるらしい。

怨霊にならないように、勇者の力で浄化だけしておいた遺体を光の炎で火葬する。こうすれば、闇の力でアンデッドに作り変えられる事もない。

俺が火葬してる間に、イデアとアースラが墓穴を作ってくれてたからそこに納めて、墓石を立てる。墓碑銘はない。まだ決められないと小さな姫（王家唯一の生存者だった）が言っていたから、決めた時に刻めるように魔法をかけておいた。

「問題は結界ですわね」

「……はい」

どうしよう、と王女二人が途方に暮れた顔をしている。よくよく聞いてみれば、周辺の魔物が入ってこないようにする為の結界の礎が完璧に破壊されていて、このままだと魔物が入りたい放題らしい。そう言えば、魔界でも村や町の中に魔物が入り込むと色々面倒だから、魔物除けの結界を張る為の道具があったなあ。

人間界の村や町で使われている魔物除けの結界の礎は、大抵神聖

王国の高位神官が清め聖別した聖具が使われているらしい。普通に魔術師が魔力を込めた魔具を使っている所もあるようだ。旅のお供に小規模結界を張れる使い捨ての物や、魔力を込め直せば何度でも使える物もあるらしい。

何はともあれ、現状で結界を作り出して維持するだけの魔道具を作れるのは俺だけのようだから、城下町と城の四方にある壊れた聖具に勇者の力を注いで直しておいた。魔力で直すだけならアイデア達でも可能だが、魔王や魔族の魔力で作られた礎で張った結界だと後々この国が方々から非難されかねない。

「……やりすぎたか？」

「特に問題ないでしょう。ここを害する目的でなければ入れるようですし」

十分気をつけたつもりだったんだが、やっぱりまだ勇者の力はコツがつかめてないらしい。高位魔族でも十分に準備しないと破れないような強烈な結界が出来ちゃった。ああ、王女と姫が固まってる。

「あの、魔王様」

「……なんだ？」

「これほど強力な結界を張っていただけなのは正直嬉しいのですけど、お疲れになりませんか？ずっと魔法を使い続けておられますけれど……」

「いや。元々無尽蔵に近いから、さほど疲れは感じないな」

普通の魔術師や魔族でも、魔力には限りがある。あまり使いすぎると虚脱感を感じ始め、魔力が枯渇したら動けなくなる事もあるんだが、魔王な上に勇者の力まで与えられた俺はもう上限がどこにあるのかよくわからん。とりあえず、召喚されてからこっち、普通の魔術師なら最低でも二回は枯渇してるぐらい魔力を使っている筈だ

が一割も減った気がしない。どこまでもチートだ。

もう少し、あれこれ手伝おうかと思ってたんだが、何故か総出で止められて手持ち無沙汰になった。埋葬に結界作成しかしてないって言うのが俺の認識なんだが、ナターシャ姫や他の人間達からすれば埋葬だけでなく結界作成（しかも無駄に協力）までしてもらったんだからこれ以上頼れない、と言う事らしい。

無駄にチートだからどんなに使ってもらって構わないんだがなあ。

「陛下は、大分親父と違いますね」

「……それはそうだろう。同じ物を継いだとは言え、継ぐ本人が別人だ」

同じく手持ち無沙汰な様子のヒューベルと城の中庭で元氣よく戯れる子供達を眺めつつぽつりぽつり言葉を交わす。

ヒューベルが最初に興味を持ったのはナターシャ姫の祖父で、ギイラスも含めて悪友っぽい関係だったらしいが、最初にあの馬鹿共がこの小国を襲った時、姫以外の王族は即座に殺された。どうも連中、この国の王族一家全員がヒューベルの特別だと知らなかったらしい。で、怒り狂ったヒューベルが暴れだす前に、姫を人質にしたんだとか。

「……その腕は？」

「結界の対価に。……不思議なものです。人間なぞ、レグラムやその血縁以外、どうなろうと知ったことじゃないと思っていたのに」

幼い頃から共にいる侍女や、小国ゆえに身近だった城下町の人間達が結界を作る為だけに殺されていくのを見て泣き叫ぶナターシャ姫を見てられず、気づけば自分で自分の腕を切り落としていたらしい。だからあれだけ大規模な結界が出来た訳かと納得した。

「治すか？」

「いえ、このままです。地道に回復していこうと思います」

「……姫が悲しむぞ」

「それでも。……レグラム達を守れなかった責を負わねば、私が私を許しません」

魔力の塊でもある魔族。片腕がないって言うのは、腕一本分魔力が減るって事でもある。かなり実力が落ちるし不便だろうに、それでもヒューベルはこのままでいいと言う。随分意思が固そうだから、説得はナターシャ姫じゃないと無理だろう。そう判断して、この場は何も言わずにおいた。

「これからどうするんだ？」

「お許しがいただけるのであれば、この国で、ナターシャ達と共に在りたいと思います」

「……好きにしろ」

「ありがとうございます」

生真面目に頭を下げるヒューベルも、ギィラスと同じくかなり子供達に好かれている。小柄な少年の姿をしていても魔族だから、子供達が腕や背中へばりついて鈴生りになっても倒れることはない。見た目はかなり面白い事になってるんだが、それは言わぬが花だろう。

十一話（後書き）

チートな自覚はあれど、それが他人にどう見えるのかと言う自覚がない魔王様でしたw

お気に入り登録が500超えててビックリです。
本当にありがとうございます（ぺこり）

十二話（前書き）

なんだかんだで小国に二話居座ってます。

……あれえ？

そしておやつを作る魔王様があります W

十二話

小麦粉とバターと卵と砂糖。後、牛乳。

混ぜて混ぜて、形を作って、油で揚げたら簡易ドーナツの出来上がりだ。砂糖を振ってもよし、そのままでもよし、シナモンパウダーをまぶすって手もある。

混ぜるのと形作るのと揚げるのは魔力を使って対象を動かして作ったドーナツは子供達のおやつだ。

あの馬鹿共、碌な物食わせてなかったみたいで、すごい勢いで減っていく。腹壊さないか心配になってきたぞ。

「料理、なさるんですね」

「手慰み程度にな」

エレノアみたいに手の込んだ物は無理だ。あれはもう芸術の域に達していると常々思う。飾り切りなんて特に。

ホットケーキでも良かったんだが、あれだと一度に大量生産できないからドーナツにしたのは正解だったらしい。大皿に山盛り作ったドーナツは全部子供達の腹に消えた。はやいな、おい。

取り分けてあった分は王女と姫に。問題は晩飯か。

「何時も食事はどうしてたんだ？」

「簡単な炊き出しだけ許されていました」

「……備蓄はほぼなし、か」

食料庫に魔力の目を飛ばして覗いてみたが、まあ見事に空っぽに近かった。あったのは干し肉干し芋なんかの携帯食のみ。あれじゃあ大人は我慢できても子供は無理だろう。

この周辺は天然の食物の宝庫だとヒューベルが言うから食材は現地調達で良いとして、問題は作り手なんだが……アイデアに怒られる覚悟決めるか。

「……悪いな、手伝ってくれ」

「陛下のお呼びとあらば何なりと」

魔力球に事情と召喚術を込めて、魔王城のエレノアの所に送る。即行で召喚円が展開され、シニカルな笑みを浮かべるエレノアがそこにいた。驚くヒューベルに紹介して、厨房に案内してもらおう。

ややもせず、アイデアがすっ飛んできた。ほんとにエレノアの事となると行動が早い。一番驚くだろうヒューベルは、中庭に残した子供達の所に戻っているので不在だ。ちょっと反応が見てみたかった気もする。

「陛下、エレノアの気配が……!?!」

「……ああ、俺が召喚した」

「陛下のお呼びだ、応えぬ訳にはいくまい。料理を作ればよいのですか?」

「料理人が不在らしいからな」

「畏まりました」

カチン、と音がしそうなぐらい勢いよく固まったアイデアが見えない筈はないだろうに、エレノアはさっくり無視して調理器具の確認をし始めた。周辺に飛ばしっぱなしだった魔力の目に、アイデアを探すアースラが映る。エレノアの気配を感じて作業放り出して来たのか、アイデア。

「……イデア」

「っ、はい」

「アースラが探している」

告げるやいなや焦った顔でイデアが走り去る。律儀に俺に一礼していったが……転移使った方が速いんじゃないだろうか。忘れてそうだなあ。

「エレノア、何が要る？」

「香辛料の類はありますから肉と野菜を。お手数をおかけして申し訳ないのですが、城の調理室からパン種を取り寄せていただけますか？今から仕込んだのでは夕飯に間に合いません」

狩りと収穫は使い魔達に任せて、魔王城の調理室に備え付けてある保管庫からパン種を取り寄せる。色濃く染み付いている俺の魔力は取り寄せついでに抜いておいた。流石にこのまま調理したものを食ったら人間は魔力に中る。

肉と野菜も短時間であっさり届いた。どっちも魔王城の保管庫から取り寄せた方が速いんだが、見慣れた物の方が安心して食べれるだろう。魔界の肉は魔物の肉だしな。言わなきゃばれないと思うけど。

「足りるか？」

「十分です」

「献立は任せる」

「はい」

厨房は専門家に任せて中庭に戻ると、ヒューベルだけじゃなくアデイスも子供の成る木になっていた。

「エレノアと呼ばれたのですか？」

「ああ。料理は専門家に任すに限る。育ち盛りが多そうだしな」

纏わり付いてくる子供達を眺めながら、アデイスは納得顔で頷いた。

剥がれた石畳や壊れた塀、崩れた家屋等の除去作業と、比較的被害の少なかった家屋の修繕まで終わらせて、今日の分は終了って事になったらしい。アデイス達の方でも住民が遠慮したっぽいから、夜寝静まったらこっそり石畳と塀は直そうと思うんですがと許可を求められた。

一日二日の徹夜で睡眠不足になる程魔族の体は柔じゃないから好きにしろと言っておく。やりすぎるなよと釘も刺しておいた。じゃないと塀が無駄に強固になりかねない。うっかり超強力な結界を張った俺が言えた義理じゃないが。

さて、この場にはいないイデアとアースラは城内の清掃作業をしているようだ。破れたカーテンやカーペットを片っ端から回収している。そのついでに陥没した廊下や崩れた壁を魔力で修繕して進んでるから、気の毒にあいつらの後ろからついて回ってる人間達が唾然としてる。

二人にはほんとに「ついで」でしかないんだが、人間にはそんな事わからないから「頼りすぎてないか？」と表情で語っている。どうにも言い出しにくそうだったから、魔力を用いた専用回線経由で、二人に「人間が頑張ればどうにかなりそうな破損はそのままにしないでやれ」と言っておいた。

何となく察したらしく、あまりに酷い破損以外は放置して進むようになった二人に、後ろからついて行ってる人間達が不思議そうな、けどホッとした様な顔になった。

目を城内から外へ飛ばすと、レジフは町の近くで立ち枯れた木を伐採していた。……そう言えば厨房は薪で火をおこすタイプだったな。今度は薪を貯蓄しておく場所に移動させて確認したら残りわずかだったから、レジフの近くに貯蓄場所への直通回路を開いておいた。持ち運びは苦じゃないだろうが、運んでるのを見たらナターシヤ姫達がまた遠慮しかねない。

エレノア作のごった煮シチューは美味かったが、王女と姫から「何から何まですみません」と頭を下げられてしまった。美味しい飯が食いたいの俺の我僕もあったから、真剣に感謝されるとかなり困る。

まあ、エレノアと王女達が仲良くなったみたいだから、よしとしておこうと思う。

十二話（後書き）

く……また帰還できなかった。
どうしても長くなるorz

十三話（前書き）

やっ と 帰 還 い た し ま し た 。

十二話で お や つ 作 り に 魔 力 使 っ た 魔 王 様 で す が 、 素 手 で や る と 時 間 か か る か ら ら し い で す よ w

十三話

翌日もあまりに復興に時間と手間のかかりそうな所だけ直すのを手伝った。と言うか率先して魔力フル活用で終わらせた。魔族が修繕したって証拠が残るとまずそうだから、魔力で直した場所は全部勇者の力で上書きしといたけどな。いちゃもんつける奴はそれがどれだけ些細な事でも嬉々としていちゃもんつけてくるから。勇者の力Ⅱ女神様の力の欠片だから、これにいちゃもんつけれる輩はいないだろうとリーズ王女が太鼓判を押してくれた。

で、現在俺が最初に女神様に召喚された場所に転移で戻ってきたところだ。事前に王女直筆の手紙を使い魔に持たせて運ばせたからか、王様やら神官長やら数名が召喚の間入り口に待機してて、その後ろには物々しい騎士団が勢揃いしている。

「お父様！」

「おお、リーズ。無事で何よりだ。……その衣装は一体？」

「魔王様が、エリスアーカンジェラ様の力の欠片で作ってくださいました加護付の装備です。召喚当日の衣装のままでは不便だろうと、アルマダの物まで作ってくださいました」

「なんと……」

絶句する王様達に王女はやや興奮気味の口調で、矢継ぎ早に如何に俺に世話になったかを語り始めた。恐怖の対象になる気は更々ないが、これまでの魔王の逸話を知ってるらしい面々が非常に複雑な

顔をしてるぞ、王女様。

「移動も、人の身に転移魔法の連続使用はよくないからとわざわざ馬車を用意してくださって……馬車の中なのに王宮にいるような快適さでした。話し相手にとつけてくださった使い魔の方もとても洗練されていて、お茶菓子も珍しい物が多くて。魔王様、ご迷惑でなければレシピをいただけませんか？」

「……料理長に打診しよう」

「ありがとうございます」

微笑んで一礼する王女に周囲は完全に停止している。アルマダ女史ぐらいだぞ、苦笑ですんでの。

あの小国で、エレノアを召喚する時に使った連絡用魔力球を魔界に送ると、即座に人間界の材料で作れる茶菓子のレシピがビッシリ書かれた冊子が返ってきた。準備いいな、エレノア。

王女にそのまま渡すと障りがあったから、近くにいたアルマダ女史の所に浮かせて運ぶ。受け取った彼女は中身を確認してからリーズ王女に渡していた。

「まあ、こんなに！」

「どれも地上の材料だけで作れる物だそうだ」

「ありがとうございます！エレノア料理長にもお礼をお伝えください」

ぱらぱらと冊子を捲って笑顔を振りまく王女。可愛いんだが、そろそろ彫像になってる国王以下国民に気づいてあげた方がいいんじゃないだろうか。

「魔王様はこのまま戻られてしまうのですか？」

「……勇者の仕事は果たした。魔王が勇者に選定されたなど、前代

未聞だろう」

「それは確かにそうですけれど、魔王様は女神様が選ばれた正式な勇者です。お気になさる事はないと思いますわ」

真っ直ぐな王女様は背後で王様や大臣っぽい男達が渋い顔をしているのに気付いていない。位置的に俺達にはばっちり見えるから、アースラが心底嫌そうに溜息をついた。まあ、あれが普通の人間の反応よなあ。

「全ての人間が王女のように容易く割り切れはしないだろう。それほどに代々の魔王の業は重い」

「ですが……」

「その気持ちだけで十分だ。勇者は責務を果たし、何処かへ去ったとでも言えればいい」

あまりに王女が食い下がりと周囲を囲んでる騎士団が動きそうだったから先手を打っておく。元々、自称魔王一派を一掃する為に女神の勇者召喚を承諾しただけだから、魔族と人の垣根をなくしたいとかそんなご立派な目標はない。

と言うか、一朝一夕で垣根がなくなるぐらいなら苦労はないと思うわけだ。個人的に。

「魔王陛下、この装備は如何すればよろしいでしょうか？」

「……専用に誂えた物だ、好きにするといい」

強制的に着替えさせた礼装と騎士服を、ちょっとした細工をしてから返しておく。

視線をリーズ王女とアルマダ女史から国王の方へ移す。彼女達ほど順応力高くないようで、国王も神官も騎士達も目に見えて怯んでくれた。別に魔王の気配も気迫も使ってないんだが……。

水晶に閉じ込めた首謀者の首を国王達の近くに落とす。

「自称魔王の首級。届けたぞ」

「た……確かに。勇者としての働きに、か、感謝する。……ほ、褒美は、望みの物を……」

「不要だ。……魔王を自称し、暴れまわる連中が不快だっただけの事」

ゆっくりと召喚陣の中央から周囲を見回す。

明らかに護衛にしては過ぎる数の物々しい騎士達が、それぞれ一歩下がる。鎧の装飾が違う騎士が何人か踏みとどまったが、動く事は無理のようだった。まあ、ちよつと気配を乗せて一瞥したしな。

「……帰るぞ」

『はっ!』

魔王城に一瞬で帰る事も可能だが、まあちよつとした演出って事でわざと転移の魔方陣を具現化する。

咄嗟に一步、こっちに足を踏み出してきた王女はアルマダ女史が止めてくれた。うん、流石に魔界には連れてけないからな。

「魔王様!」

「……何だ」

「本当に、ありがとうございました」

淑やかに一礼したりーズ王女の傍らで、アルマダ女史も騎士としての最敬礼をとっていた。

ひらりと軽く手を振って答えとして、転移を発動させる。一瞬の魔力の風の後、そこは見慣れた玉座の間だった。

十三話（後書き）

これにて自称魔王討伐編、終了です。

次の章もあらかたネタは出てるのでちまちま書いていこうと思います。

派生ネタが多くてどうしたもんだ、って感じですがw

まあそれ以上に問題なのはスランプ期orz

ここまでご愛読くださった皆様、ありがとうございました！

まだまだ続きますので気長にお付き合いくださいませ。

番外編：王女様と銀の鈴（前書き）

本編ではないですが番外編が仕上がったのでu p。

十三話で帰りがけ魔王様が仕掛けた礼装への細工です。
王女が駆け出した理由とかも少々。

番外編：王女様と銀の鈴

自称魔王の首級を届けて魔界に戻って早一週間。

リーズ王女とアルマダ女史の礼装に施した仕掛けに、どっちが先に気付くかなあとのんびりしながら待ってたら、王女が先に気付いたらしい。まあ、アルマダ女史より礼装を身につける機会多そうだから、当然と言えば当然かと思いつながら魔力と姿を隠蔽して空間を渡る。

どこぞのパーティー会場っぽい場所に出た。何かの式典か祝いだろう。何かは知らんが。

仕掛けの魔力を頼りに王女を探すとすぐ見つかった。元気そうだが、ちよつと沈んでる感じだなあ。

「息災そうだな」

「っ！？……魔王様」

軽い人払いの魔法をかけて王女が一人になるようにして、周囲の護衛騎士の死角からこっそり声をかける。父親や年配の大臣達よりよっぽど肝の据わった王女様は、一瞬大声をあげかけたものの即座に俺だと気付いた。

「魔王様、どうしてここへ？」

「……鈴を鳴らしたろう」

「やはり、これは魔王様の意図でしたのね」

礼装のウエスト部分。紐飾りに紛れてひとつだけ、小さな銀の鈴が下がっている。手袋をはめた手で鈴に触れた王女が、飾り紐の部分をつかんで軽く揺らせば涼やかな小さな音色が響いた。

俺が礼装を返す時に、王女の方に施した仕掛け。どれだけ離れていても、リアルタイムで俺に届く鈴の音。この国の重鎮や神殿関係者は魔王が勇者だと認めたくないだろうし、下手したら俺を、俺達を認めている王女様が邪魔だと思えるかもしれないと思ってかけた保険だった。

それを告げると、ほろ苦く王女が笑む。どうやら既にあれこれ釘を刺された後のようだ。

「皆、お父様までも魔王様が勇者だと認めようとしません。討伐してくださいだったのは事実魔王様と魔大公様方ですのに」

「……そんなものだろう」

「勇者である魔王様を認めないと言う事は、魔王様を選定なさったエリス様をも否定すると言う事です。それがわからない父達ではないと思いますのに……」

確かにそう言う事になるんだろうが、それでも代々の魔王に対する感情が嫌悪と憎悪を突き抜けてるから認められないんだろう。

「大臣達は、勇者の代役を立てるとまで言いましたわ」

「……俺はかまわんが、すぐに露見するだろう、それは」

「ええ。エリスマーカンジェラ様が直接授けられた加護か否かはすぐにわかりますもの。流石に実行しようとは思いませんでしたが、私、呆れてしまいましたわ」

このパーティーも、魔王が討伐された事を祝して行われている物らしい。城下町でも出店などが出てお祭り騒ぎだとか。

今まで明日は我が身かと戦々恐々として過ごしてたんだから、こ

う言う明るい話題で騒ぐのは良いことだと思う。この場で俺やイデア達を堂々と紹介できない事に、王女様は申し訳なさそうだが。

「代々の魔王と、それに従う魔族達の所業は許されていいものではない」

「それは……そうですね」

「人間達の中に例外が出来た。それで十分だ」

そう、リーズ王女やアルマダ女史。そしてあの小国の人間達。

地上の総人口から見れば多くはないが、それだけの人数が魔族へ悪感情ではなく好感感情を持ったというのは凄い事だと思う。

「王女。その鈴は、悪意ある攻撃から王女を守るようにしてあるが、万能ではない」

「はい」

「俺達魔族への好感感情はありがたいが、それが王女の身を危険にさらすのはいただけない」

「……申し訳ありません」

「謝る必要はないが、あまり表立って魔族を擁護しない方がいい。余計な反感を買う必要はない。主を失った国は荒れる」

そう、神聖王国にはリーズ王女以外に王家の血を引く若者がいない。

あまりに魔族を擁護しすぎ、大臣達に煙たがられて王女が排除された場合、この国がどうなるのかがかなり心配だ。王女が成人して女王として即位すれば、少なくともその間は魔界へ進行とかの馬鹿をやらかす事は表立っては不可能になるだろうし。

「ありがとうございます、陛下。この国を案じてくださって」

「……俺が真に案じるのは魔界だ。他はついでに過ぎん」

「存じております。私とて、他国と自国では自国を優先しますもの」

沈んだ様子が払拭された王女が笑う。笑いながら俺みたいな兄が欲しかったと言うものだから、正直対応に困った。俺達が魔界に戻る時、魔法陣を展開した時に咄嗟に足を踏み出したのも、国を担う者として俺と対話がしたかったかららしい。

俺の考えは魔族の物だから、人間の国を治めるのには向かないと思うんだが王女様的には学べる部分が多々あるらしい。さっぱりわからないが。

結局、勢いに負けて王女と文通する事になった。小ぶりの文箱を二つ作り出し、転送の魔法で繋いでから片方を小型化して王女に渡す。王女が設置場所を決めたら自動で元の大きさに戻るようにしておいた。

「ところで魔王様、アルマダの礼装にも秘密がありますの？」
「……ああ」

秘密と言う程ではないが、アルマダ女史の方は彼女より実力の低い奴の武器攻撃の威力軽減と、ある程度の攻撃魔法を弾くようにしてある。毒とか麻痺とかの妨害系の魔法も、その時の精神状態によって無効化が可能。まあ、よほど精神的に弱ってない限りは効かないだろう。

式典に騎士が礼装で参加する回数はあまり多くはないが、その少ない機会を狙われないとも限らないからそう言う細工にしてみた。そう教えると、自分の事の様に微笑んで「アルマダに伝えておきます」と王女は言う。

リーズ王女からの一通目は、アルマダ女史からの礼の手紙を含めた感謝の手紙兼、頭の固い神殿関係者と一部大臣達の愚痴だったのは……まあ余談だ。

番外編：王女様と銀の鈴（後書き）

自称魔王討伐編終了後、たくさんのお言葉をいただきました。
ありがとうございます。

ぶっちゃけ自称魔王は名乗りすら上げれずに瞬殺されましたw
あんな不憫なラスボスもそうはいないと思いますwでもまあ実力差
ありすぎですからw

機械の発展は……どうでしょう。何せ魔王様、何をするにも魔力で
パパッと出来ちゃうお方ですから、機械とは相性悪いかも知れませ
ん。そのうち別の国とかで書くかもです。

喉元過ぎれば何とやら、早々と忘れそうな神殿関係者十国の重鎮達
の今後は次の章でちらほら出てくる予定です。

若干スランプですがチマチマ書いていこうと思いますのでよろしく
お付き合ってくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4011/>

当代魔王は勇者様！？

2011年1月19日11時21分発行